



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<https://www.ryoma-kinenkan.jp>

## 新春 SHINSHUN RAIFUKU 来福

### ここは館長の部屋

## 新年の所感

吉村 大



新年、明けましておめでとうございます。  
新しい「午」の年に、良き新春をお迎えのことと慶び申し上げます。

昨年は坂本龍馬生誕190周年にあたりましたので、収蔵品展・「龍馬の評伝」や、ポストカード・「龍馬へ贈る手紙」をはじめ、常設展・「土佐弁特別音声ガイド」や、入場セット券・「龍馬に大接近&坂本龍馬記念館」といった、新たな取り組みを通じて賑わいを創り出し、多数のご来館をいただきました。朝の「連続テレビ小説」の放送効果も追い風になったと感じています。

「龍馬月間」中の11月22日には、「第37回龍馬World東アジア大会」が開催され、高知とタイやオランダらの龍馬会を多元中継でつなぎながら、基調講演やパネルディスカッションをはじめ、高知会場では、高知市の第四小学校や城西中学校、上街保育園の児童生徒と先生方などが登壇されて、龍馬が生まれた上町をテーマとするオリジナル曲を合唱されました。龍馬とそのふる里に敬意を払う楽曲と歌声、そして創意と工夫に溢れる同大会のプログラム群にも胸を打

たれる思いがしました。

現在、当館では「柳内良一コレクション展―維新史料の蒐集にかけた40年―」という企画展を開催しています。故・柳内氏は大阪に生まれ、校長職も含めて長らく中学校教育に携わりながら、幕末・維新期の史料群の蒐集も続けてこられました。このほど、ご家族のご厚意を得て、同氏の40年以上にわたるコレクション群を当館にて収蔵する運びとなりました。

同展では、多様なコレクションの中から、皇女和宮や新撰組・永倉新八、薩摩藩重役・小松帯刀、与力・大塩平八郎などを巡る史料を展示しています。本県では初公開となる錦絵や、幕末の偉人の直筆書簡をはじめ、新撰組幹部の手記など、厳選した一級の史料群をこの機会にご観覧いただいて、柳内良一氏の足跡とともに、幕末史の息吹をぜひ体感していただければと思います。

来月11日からは、今年度の最後を飾る企画展「郷土坂本家の秘蔵展」にスイッチします。龍馬の実家である「郷土・坂本家」。その本家にあたる才谷屋は、近世土佐の豪商で、3代目の八郎兵衛直益の時に長男を分家させて郷土株を取

得させ、武士の家を創らせました。これが「郷土・坂本家」のルーツです。本企画展では、同家より寄託された史料群を中心に、龍馬の遺品や、同時代を生きた先人たちの書画類をはじめ、明治の時代に北海道に移住された「郷土・坂本家」ゆかりの写真や絵画、彫塑などを展示し、その息遣いを紹介します。

新しい年においても、幅広い層の方々に向けた「龍馬館」らしい企画とそのアップデートの取り組みを進め、来館者の満足度の向上と、龍馬ファンのすそ野の拡大にもつなげてまいりますので、本年もお引き立てのほど何とぞよろしくお願いいたします。



※12月17日に出動していた職員で撮影したものです。

# 企画展

## 「郷土坂本家の秘蔵」展

会期：令和八年二月十一日(水)～四月七日(火)

近世土佐の豪商として知られる才谷屋。明和七年(一七七〇)、才谷屋三代・八郎兵衛直益は長男の兼助を郷土とさせ、次男の八次に本家・才谷屋を相続させました。以降、兼助の家系は才谷屋の分家・郷土坂本家となり、現在に至るまで続いています。

龍馬は郷土坂本家三代・八平の子として生まれており、龍馬の遺品や関係者の書画類の一部は同家にて長年秘蔵されてきました。その秘蔵品の内、約七百七十点にも及ぶ資料がこの度当館へ寄託されることとなりました。寄託された資料は、写真・銅像・書画・書簡・つづら・日用品など多岐にわたります。

本企画展では郷土坂本家の当館寄託資料群を中心に、龍馬の遺品や同時代を生きた人々の書画類に加え、龍馬の没後に作成された龍馬を顕彰する品々をご紹介します。

### 勝海舟書

龍馬の没後十五年の際に書かれた勝海舟の書は、本企画展の目玉といえるべき資料です。

### △翻刻文▽

日月如転丸追想堂

漠然一龍蓋棺既過十

五年 坂本龍馬没後已

十五年感慨之餘 / 以拙詩寄坂本直兄

辛巳仲冬 海舟勝安秀

漢詩文の三行書で、現代語訳にすると、「月日は転丸のように過ぎてゆく。ああ、過去を思い返すと漠然となる。一匹の龍が棺桶に蓋をしてから既に十五年が過ぎた。」となります。筆頭弟子であった龍馬の存在は、勝の心に深く刻まれていたのでしょう。幕末という激動の時代を生きた勝ならではの文章で、どこかアンニュイな雰囲気を感じさせます。

「以拙詩寄坂本直兄」とあるように、この掛軸は坂本直に贈られました。

### 龍馬の甥・高松太郎

坂本直は、元の名を高松太郎といい、龍馬の姉・千鶴の子で、龍馬の甥にあたる人物です。

高松太郎(坂本直)は、天保十三年(一八四二)に土佐国安芸郡安田

村(現・高知県安芸郡安田町)の郷士の長男として生まれました。文久元年(一八六一)には叔父である龍馬に誘われて土佐勤王党に加盟し、京都への上京を機に、三条実美・姉小路公知・大原重徳・久坂玄瑞らの攘夷派の人々と交流するようになります。そして、文久三年(一八六三)に勝海舟の弟子となり、以降、亀山社中・海援隊にも所属し龍馬と行動を共にしました。

明治四年(一八七二)八月二十日、明治維新において功績をあげた龍馬・慎太郎の後嗣が無いのを哀れんだ朝廷は、高松太郎(小野淳輔)に龍馬の跡目を継ぐよう命じました。これにより太郎(淳輔)は坂本直と名を改め、郷土坂本家の分家・龍馬家を誕生させました。

直が持っていた龍馬の遺品類は、直の息子・直衛や直の妻・留へ引き継がれており、留が保管していた資料は郷土坂本家七代・坂本弥太郎のもとに移りました。

本企画展では坂本弥太郎に引き継がれた資料を中心に展示

する予定です。本稿で紹介させていただいた勝海舟書の他にも、郷土坂本家に秘蔵されてきた貴重な資料は多数ございます。是非この機会にご覧いただければ幸いです。

企画展に関連して、

①坂本匡弘氏(郷土坂本家十代目)による記念講演会

三月十四日(土) 十三時三十分～十五時

②担当学芸員の展示解説

二月十五日(日) 十四時～

三月十四日(土) 十二時～(各回三十分程度)

③ミニ掛軸を作るワークショップ

(小学生～大人まで参加OK！)

二月十三日(祝・月) 十四時～十五時

を開催予定です。

皆様のご参加をお待ちしております。

小部さくら



勝海舟書(坂本家所蔵・当館寄託)

## 収蔵品展

# 「龍馬の評伝」展を終えて

本展は、龍馬と面識のある同時代の人たちを中心に、龍馬についての評価を集めてパネルで紹介することで、龍馬の実像に迫ろうとした。

取り上げたのは、お龍をはじめ、武市半平太・平井収二郎・三吉慎蔵・木戸孝允・中江兆民・陸奥宗光・永井尚志・佐佐木高行・板垣退助・谷干城・大山巖・勝海舟ら25人。これらの人物について、当館収蔵品の中から関連資料を選び、龍馬評のパネルと共に展示した。本稿では、その中から特に興味深い陸奥宗光の直筆書簡を紹介する。

陸奥宗光が山形監獄から9月19日に、陸奥の世話をしていた伊藤和一へ出した書簡で、明治11年（1878）と推定できる。前年2月、鹿児島で西郷隆盛らが拳兵し、西南戦争が始まった。これに呼応して、土佐派と呼ばれる高知の立志社の大江卓や林有造らが、大阪城乗っ取りや政府の転覆を計画した。

その頃、元老院幹事だった陸奥は、

薩長が独占している政府に対して不満を抱いており、土佐派の政府転覆に荷担した。しかし、土佐派の行動は早々に露見し、陸奥も捕らえられ、山形の獄舎に入れられた。陸奥にとつて、土佐派のさまざまな計画に加担したことは、人生から抹消したい黒歴史となった。

### 【資料紹介】

小拙無<sup>ニ</sup>別条<sup>一</sup>安心アル可シ。此篠田源之丞<sup>ト</sup>申人<sup>ニ</sup>ハ一形ナラズ御世話<sup>ニ</sup>相成候条、其方より可<sup>レ</sup>然御礼可<sup>ニ</sup>申上<sup>一</sup>候。且又新聞紙指入之儀<sup>ニ</sup>出願中之由ナレドモ、品<sup>ニ</sup>寄許可無<sup>レ</sup>之哉も難<sup>レ</sup>計候。左候時ハ総而此篠田氏之手を以て内見可<sup>レ</sup>致答<sup>ニ</sup>候間、篠田氏迄<sup>ニ</sup>日々新聞相廻り候様之手都合可<sup>レ</sup>致候。自然留守宅より直ニ篠田氏へ相廻シにてハ大ニよろしからず候間、篤<sup>ト</sup>篠田氏ト相談之上、目立不<sup>レ</sup>申様送り方可<sup>レ</sup>致候。小拙之考にてハ篠田氏、少々金子相預ケ置、右金子にて篠田氏より直ニ東京新聞社へ注文<sup>ニ</sup>相成候得ば、一向ニ他<sup>ニ</sup>関係無<sup>レ</sup>之して他見もよろし

かるベシと存候間、此辺も篠田氏ト相談シ可<sup>レ</sup>申候。尤も是ハ新聞指入願之儀許可無<sup>レ</sup>之時之事ナレバ、兎も角も右願書之都合相待候上にて万<sup>一</sup>許可有<sup>レ</sup>之候へば前段の都合ニハ不<sup>レ</sup>及候也。○其方ハ何時ニ帰京之筈ナル哉、帰京前ニハ是非面会いたシ度候得共、可<sup>レ</sup>成ハ帰京之日取極リタル上にて面会ス可シ。○此書請取タレバ一寸返書篠田へ相托シ可<sup>レ</sup>申候。近日佐々木議官申人此地へ参り候よし。是ハ甚々用心すべき人物故、何事も洩レザル様ニ相心得可<sup>レ</sup>申候。

（明治十一年）九月十九日

福堂光

伊藤和一の

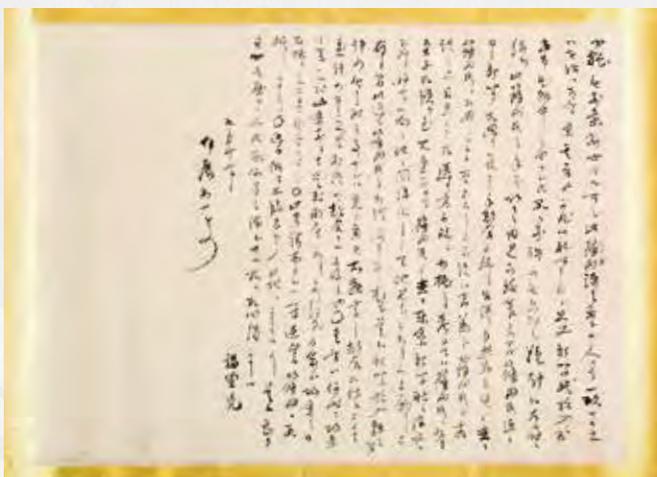
書簡の内容は、伊藤和一に新聞の差し入れを依頼し、正式なルートで許可を得られない場合は、篠田源之丞に相談することなどを指示している。

そして、最も注目すべき箇所は、終わりから3

行目の「佐々木議官」の話である。これは、おそらく元老院議官を務めたことのある佐佐木高行のことと思われる。陸奥は佐佐木を「甚だ用心すべき人物」と見ていたように、大変面白い。

収蔵品展は年間2回開催しており、今後も収蔵庫で眠らせておくには勿体ないような資料を、積極的に公開していきたい。

三浦夏樹



陸奥宗光獄中書簡 伊藤和一宛  
明治十一年（一八七八）年九月十九日（当館所蔵）

# 龍馬まつり in 記念館 振り返り

11月15日は、坂本龍馬の誕生日であり、当館の開館記念日です。生誕190年を迎える今年は、15日と16日に「龍馬まつり in 坂本龍馬記念館」を開催しました。

15日は県内の義務教育学校土佐山学舎の児童の皆さまによる演劇披露から幕が開けました。坂本龍馬がどんな人物だったのか、県内外問わず多くの方に知っていただくために、学芸員の話や展示をもとに、シナリオや演出、小道具まで、すべて児童たちで作りに上げた、龍馬の生涯を紹介するオリジナルの演劇披露です。高知で育った現代の小学生



たちが坂本龍馬記念館に行き、龍馬の生まれから近江屋での遭難までを振り返っていくというストーリーで、龍馬とお龍さんの新婚旅行のエピソードに会場内から笑いが起きたり、近江屋での緊迫の様子が再現されていて、龍馬のことや当時のことをたくさん調べて作ってくれたことがとても伝わってきました。会場のホールは満席で、立ち見のお客さまもいらっしやり、演劇が終わるとたくさんの温かい拍手につつまれました。

午後には、第2回・龍馬カルタ大会を開催しました。県内の子どもたちや、県外から初めて龍馬記念館に来た方も一緒になって、みんなでカルタをします。カルタを初めてする子どもたちと、久しぶりにカルタをする大人たちと、白熱した勝負が繰り広げられました。



また、本館2階「海に見える・ぎゃらりい」では、寄せ書きスペースを設置し、ご来館いただいた皆様から龍馬へのメッセージをたくさんいただきました。誕生日をお祝いするイラストや、龍馬への熱い思いを書き込んでくださる方が多く、日に日に増えていくメッセージを見ることが11月の楽しみでした。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました！



11月15日を迎えて、当館は開館から35年目に入りました。年が明け、今年<sup>ひょうね</sup>は午年です。2026年は丙午<sup>ひょうま</sup>の年で、力強く前進する年とされ、馬のように躍動感や活力に満ちて、大きな飛躍のチャンスをもたらす年とされています。龍馬の名前にも「馬」の文字があります。龍馬の魅力<sup>魅力</sup>を改めてたくさんの方に感じていただけるように、職員一同、勢いとエネルギーをもって励んでまいります。今年も皆様にお会いできることを楽しみにしております。

竹田 綾

# 龍馬の手紙

29

見たことがあるものと、  
ないもの。

実際に見たことがあるものについては、  
もの自体を頭の中に思い浮かべながら話  
をすることができ、見たことがない  
ものについては、ある程度想像しながら  
話をすることになる。現代に生きる我々  
がそうであるように、龍馬もまたそうで  
あったことが手紙の中に見られるいくつ  
かの表現からわかる。

文久3（1863）年6月29日付の乙女  
あての手紙の中に、「ますますすみかふて  
どろの中のすゞめがいのよふに、常に  
ちをはなのさきえつけ、すなをあたまへ  
かぶりおり申候」という面白い表現が見  
られる。ますます潜り込んで、泥の中の  
覗のように、いつも土を鼻の先へ付けて  
砂を頭へかぶっています、という意味で  
あり、龍馬の手紙の中ではこのような注  
目したいのは内容の具体性である。

覗が砂の中で生息していることは、潮  
干狩りという遊びがあることから知識と  
して知っていたため、容易に想像して書  
けたのかも知れない。しかし、土を鼻の  
先へ付けているという表現は、知識にし  
ては具体性が高い。というのも、淡水と  
海水が混ざり合う水域で育つ覗は、浦戸

湾の海水が混ざる鏡川にも生息してお  
り、龍馬は鏡川に近い所に住んでいた  
ため、おそらくそこで実際に見たこと  
があり、このように書いたのであろう。

具体性でいうと、慶応元（1865）  
年9月9日付の乙女・おやべあての手  
紙の中に見られる次の文章もなかなか  
に面白い。「あのわたくしがをりし茶  
ざしきの西のをしこみ書物箱がありし、  
其中二いかにもこげしかきがみかのひ  
よふしか、り候、小笠原流諸札の書十  
本計、ほんのあつさハ一分二分計の本  
のあつさにて候」とある。自分がいた  
茶の間の西の押し入れに書物箱があり、  
その中にたしか焦げた色の柿紙か何か  
の表紙のかかった小笠原流の札本が十  
冊ばかり、本の厚さは一分二分くらい  
です、という意味であるのだが、これ  
も龍馬自身が見たことがある物や風景  
を思い浮かべて書いている、具体性の  
高い文章である。

一方で、見たことがないため想像で  
言ったのか、事実とは異なる内容になっ  
ているものもある。札本の場所が書かれ  
た手紙の中にある、「おやべがこんべい  
とふのいがたが、おしろいにてふさがり  
候と察いり候」という表現である。おや  
べが金平糖の鑄型のような凸凹の顔をお  
白粉で塗りつぶしているだろうと想像し  
ています、という意味であるのだが、注  
目すべきは「金平糖の鑄型」の部分である。  
金平糖は熱を加えて回転させることで出  
来上がるが、龍馬は鑄型に流し込んで金  
平糖の特殊な形が出来上がると誤解して  
いたことがわかる。金平糖の製造場面ま  
では龍馬も見ることがなく、想像で書い  
たのであろう。

上村 香乃

## 龍馬館の あの日 あの頃 あの時間



龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介するコーナーです。 No.6

### ■ オープン1年目の頃

33年前、当館オープン翌年の秋、開館1周年記念「第19  
回龍馬まつり・龍馬展」が開催されました。

注目の展示品は、陸奥宗光宛の龍馬真筆書簡、現存す  
る中で最後の手紙。当時所蔵なさっていた、荒尾親成氏  
からお借りしたものでした。

「十三日」とある手紙の日付は何月なのか。すでに、定  
説の慶応3年11月と考証されていましたが、龍馬身辺の状  
況から10月説も浮上していた頃のことです。

海援隊士・陸奥宗光との、「刀」の遣り取りが書かれ  
た短い手紙。その筆字は、姉・乙女宛書簡の寛いだよう  
な書き様を思わせます。同志達とは反目もあったという  
陸奥を、龍馬は非常に可愛がり、秀でた面を認め、陸奥  
もそれに応えたというエピソードと相まって、龍馬の人  
間味も垣間見えるようなこの書簡の、当館初の展示でした。

オープン当初は展示資料が少なく、お客様からご不満  
のお声も。

その後、貴重な資料のご寄贈や、期待を寄せご協力く  
ださる方々の有難いご厚意、小椋館長はじめ初代職員の  
地まぬ努力と創意工夫で「龍馬の資料」が充実。「見ごた  
えがあった」との感想をいただけるまでになり、今に繋  
がる礎を築いてくださいました。

印象深いのは当時の展示パネルで、なんと手作り。学  
芸専門員下元さん手書きの筆字を織り交ぜて、龍馬に不  
可欠なテーマが解りやすくまとめられ、流麗な筆字は、



当時の入口(本館スロープ)

龍馬書簡の書き下し  
文であれば、お客様  
から「これは龍馬の  
字ですか？」としば  
しば聞かれたことが  
思い出されます。

手島 ゆか

天下第一の香木と謳われる「蘭奢待」をご存知だろうか。奈良・東大寺の正倉院に伝来した宝物の一つで、正式には「黄熟香」と呼ばれている。150cm余りの香木で、足利義政や織田信長といった天下人が切り取って、その香りを楽しんだことでも知られている。今年はその「蘭奢待」を取り上げた展覧会が複数行われ、筆者はそれらを観覧してきた。

まずは「正倉院 The Show」。6～8月に大阪歴史博物館で、9～11月に上野の森美術館で開催され、筆者は大阪展に足を運んだ。最新技術を駆使し、新たな宝物の楽しみ方を提案することを目指した展示で、史上初めて再現された「蘭奢待」の香りの展示が目玉である。「蘭奢待」の脱落片などを用いた調査には、成分解析や香料の専門家が参画し、その香りが現代に再現された。実際に嗅いでみると、シナモンのような香辛料の香りとその奥に甘さが漂う、なんとも形容しがたい芳香であった。これまでの歴史で、記録上は数人の権力者しか楽しんだことがなかった香りが、最新の技術を用いて再現さ

れ、筆者を含め多くの市民がそれを楽しんでいる光景は非常に印象深かった。

次に「第77回正倉院展」。「正倉院展」は毎年秋の2週間ほど、奈良国立博物館で開催されており、正倉院伝来の宝物約9000件の一部が開陳される。今年は「瑠璃坏」をはじめ67件が出品され、その一つが「蘭奢待」であった。「織田信長拜賜之処」等と記された複数の貼紙や切り取った際に付いたノミの跡が、「蘭奢待」の辿ってきた歴史を物語る。実物は人の背丈ほどの大きさがあり、写真で見るとは比べ物にならないほどの存在感を放っていた。その他、東大寺大仏開眼供養で用いられたという「天平宝物筆」や1300年の時を経たとは思えないほど色鮮やかな染物類など目を見張る宝物類の連続に、時間を忘れて見入ってしまった。

「正倉院展」は、長年にわたって大切に守り伝えられてきた歴史資料・工芸品の実物を鑑賞できる貴重な機会である。聖武天皇や織田信長が実際に目にして、手を触れた品々からは歴史の息吹を感じずにはいられない。ここでいう「鑑賞」では、主に視覚や聴覚(会場では展示楽器の音色を流すブースも

あった)で展示を楽しむ。一方、歴史系の展示で嗅覚「におい」を鑑賞する機会はほとんどない。空気中に漂う「におい」を長時間残存させることはできないし、当時は強い「におい」を放っていたものでも時間とともに弱まってしまう。また香木から破片を切り取り、実際に焚いてその香りを楽しむこともできない。いにしえの人々が感じていた「におい」を現代の私たちが体感することは

非常に難しい。それを現代の科学技術によって復元したのが、「正倉院 The Show」の展示であった。古来伝わってきた実物資料と現代の技術によって復元された「におい」の資料の両者を「感じる」ことで、私の「蘭奢待」に対する解像度は大きく深まり、また博物館における展示と人間の感覚との関係を強く意識する機会となった。

昨年行われた「蘭奢待」の調査・研究は「におい」の復元にとどまらない。組織構造・成分分析の結果、



「正倉院 The Show」(大阪展)「蘭奢待」の香り体験コーナーの様子

東アジア原産の樹木で、8世紀後半～9世紀後半に伐採あるいは倒木したことが明らかになった。つまり正倉院創建当時から収蔵物ではなく、ある時点で日本に伝来した天皇家の宝物に組み込まれたと考えられるのである。このように調査・研究と展示が連関し、新たな知見が蓄えられつつ、社会の興味関心も高められていく。博物館における資料活用の上で良い循環の在り方を、「蘭奢待イヤー」に実見できたのは非常に幸いなことであった。

## ミュージアムショップ便り

### 「自然を育む時の流れを五感で感じる」

昨年11月16日龍馬まつりの日、「魚梁瀬杉のヴァイオリン演奏会」がホールで開催されました。ヴァイオリンは、表板に樹齢150年以上の県木でもある魚梁瀬杉、裏板に16年乾燥した水目桜(カバ科)を使用し制作されたそうです。ヴァイオリニスト：川村陽華さんの演奏でエルガー、モンティ等の曲が奏でられ、初めて耳にしたその音色は柔らかく、中音の響きに特徴を感じました。中でも日本の曲が演奏された途端、その背景と景色、そして楽器としての音が一体化され、県産材の印象がより深く伝わってきました。

今回ショップでも自然を手にする二膳のお箸をご紹介します。

二隻の旗を模した帯があしらわれている黒い化粧箱を開けると、二膳のお箸と箸置きが並んでいます。お箸の持ち手には龍馬の自署が刻まれ、箸置きには坂本家の家紋が加工されています。素材には高知県産の桧と北海道産の桜が使用され、それぞれ趣の違った仕上がりになっています。

桧は加工性や抗菌・防虫効果などに優れ、香りの好さも特徴的です。お箸は、淡白な生成り色に自然な木目が美しく、手触りがとても滑らかです。

桜は硬く、木目の美しさから家具や楽器などの材料にも使われるそうです。お箸は、色合いが濃淡の幅広い赤褐色、経年変化で反ることもあるようで、個性的な印象を受けます。

伐採後は天然乾燥に1年以上かけ作業に入ってゆく。最後は蜜蝋を塗って仕上げをする手作りのお箸です。

自然を感じつつご利用いただくためのお手入れ方法もご案内しておきます。ご使用後はすぐ手洗いをし拭き取り、食洗器は避け自然乾燥させて下さい。また、食用乾性油でオイルメンテナンスしていただくことにより、潤いと艶が保てるそうです。現代社会の忙しい中、ほんの少し大切なものに時間をかけるゆとりがあってもいいのかもしれませんが。

桜のお箸には一膳もございます。ミュージアムショップにいらしたら、是非手に取り感じてみてはいかがでしょうか。



2,640円(税込)



1,320円(税込)



### 最後に2026年カレンダーのご紹介

ショップでも人気のある奈路道程さんによるイラストから12人を紹介。龍馬が抱く人物像も加わったオリジナルカレンダーもお見逃しなく！

中村昌代

# 柳内良一コレクション展の魅力

12月4日(木)から始まった本企画展。展示室内には約30点の史料を展示しており、の中には書簡や工芸品、錦絵など、多種多様な史料がございます。総数3000点以上の中から約30点を厳選したのですが、中でも特に見ていただきたい幕末期の史料をご紹介します。

一点は、浪士文久報国記事です。この史料は、新選組の隊士であった永倉新八の回顧録であり、実際に所属していた人物が書いているため非常に生々しい記録となっています。本展では、八月十八日の政変に伴う警備の記録と、池田屋事件の戦闘記録の一部を展示しております。

もう一点は、土佐藩の住吉陣屋の解体にかかわる史料群です。住吉陣屋の屋根瓦が京都の白川邸で再利用されたことがわかる内容となっています。白川邸については発掘調査に基づく考古学の視点から研究がなされました。しかし、本史料は考古の観点のみならず、歴史学の立場からも様々な情報が得られます。

このように、本展では目玉となるような著名な偉人の史料から、まだまだ研究の余地が多く残るポテンシャルの高い史料まで様々な史料を展示しておりますので、ぜひ足を運んで実際に見ていただきたいと思います。

上村香乃



和宮様御通向二付諸人足萬帳

## 記念講演会

講師・宮川禎一氏(元京都国立博物館特任研究員)

演題・歴史への興味―柳内良一コレクションの成り立ち―

日時・1月11日(日) 13時30分～15時

## ■「海の見える・ぎやうりい」

天保6年(1835)11月15日に龍馬が生まれて、昨年11月15日で190年を迎えました。4面でもご紹介しましたが、昨年11月の「龍馬月間」では特別企画として、海の見える・ぎやうりいにて「龍馬生誕190年 みんなのメッセージウォール」を開催しました。ぎやうりいの西側壁面に専用ボードを特設し、自由に書き込んでいただく形式としました。

ボードには本当に多くのメッセージをいただき、期間中2度の張替え作業を行ったほどです。いただいたメッセージの内容は、以下のように分類できました。

- ストレートに龍馬の誕生日をお祝いするもの
- 龍馬の言葉を一部引用したもの
- 記念館や高知へのご旅行の感想
- ご自身の将来の夢や希望を託すもの
- 龍馬やアンパンマンなどのイラスト

中には外国語での書き込みをいただき、国籍問わず若者男女皆さまにご参加いただけて非常に嬉しく感じました。きっと皆さんの想いは龍馬さんにも伝わっていることだろうと思います。ご参加くださった皆様、ありがとうございました。

安岡 達仁

海の見える・ぎやうりい

## 入館状況

2025年12月20日現在

(1991年11月15日開館以来 34年36日)

◆入館者数 4,844,848人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 908,088人

## 編集後記

昨年の晩秋、京都を訪れる機会があり、洛北の源光庵、東山の高台寺、そして東寺を巡り、真っ盛りの紅葉を楽しんできました。慶応3年と言えば、大政奉還から龍馬暗殺までの期間に京都は紅葉の時期を迎えたと考えられます。新政府構想を深める龍馬も市中の至るところで眺めたに違いありません。

さて、龍馬生誕200年に向かう10年が始まりました。本年も多角的な視点から歴史に迫る企画展のほか、様々な事業を行ってまいります。『飛騰』の発行もその一つ。変わらぬご愛読のほど、どうぞ宜しくお願いいたします。(や)

館だより「飛騰」第136号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏  
〒781-0262 高知市浦戸城山830  
発行日 2026(令和8)年1月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015  
発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp  
高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休  
入館料 一般500円(企画展開催時900円)  
高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は140円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。  
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで